（参考資料）

時間のたつのは早いです。外はまだ寒い風が少し吹いてもいますがもう春で、もっと暖かくなり桜の咲く頃が待ち遠しいです。変わらずお元気ですか。

Time goes by.　There's a cold wind blowing outside, but it's March now.　We'll be able to see '*sakura* ' spring flowers shortly.　Um ... I'm very much looking forward to the best time of the year !　It's still cold a little bit, so take good care of yourselves.

実は日常的なこのようなことも EP 本では人に言わない（言えない）理屈になり、言語の重要な機能の１つとしての interpersonal functions（対人関係機能）が果たされません。語の cold, warm であれば人との天候上の話で It's cold.　It's warm. はすぐさま使えますが、EP 本 I (p.94)で初出となる Ice is not warm.　It is cold. という一種の狂言(farce)じみた naïve な文例は対人コミュニケーションでの発話では実際にはほとんど使えません。EP 本は semantics のプレ入門書としては大変優れています。しかしながら、単なる referential（指示的）描写は人に心情が伝えられない理屈ともなり実用面で頭打ちにもなってきます。このあたりから EP 本の背景に潜む言語哲学的な問題への注目となります。

EP 本の実践で「日本の英語教育が変わる云々」はあまり言わないほうが賢明でしょう。大々的にこういう宣伝をするとその根拠・真の中身が徹底的に問われることになります。返答は難しいわけです。「英語を英語で」(English through English)もその英語の中身が問題で、単に日本語を用いないその状況での例文提示的なものは実際の発話行為(speech acts)ではないわけで、このあたりはよく知られる P. Grice 風の理論への注目ともなります。

EP 本も背景的な見定めが重要で、たとえば部屋の中で人が It's cold.と言えば窓が開いていたら閉めたりするのが J. L. Austin 風のいわゆる speech acts（発話・言語行

為）であり、pragmatics（語用論）での言語機能としての illocutionary act（発語内行為）です。Austin の *How to Do Things with Words* (1962)は有名な文献で、私はこの文献の表題そのものが大変好きです。人との対話・接触では words が道具の instrument となるわけで、＜We Do Things With Words.＞という深層文が見え隠れします〔今回の稿、参照〕。Trump 大統領の英語での speech acts には人は驚くわけですが、実は言語研究的にはいくつも興味深い問題を提供していると思えます。

何かと会としてはもう少し突っ込みを入れた議論が必要でしょう。そうしないと「それで何だということだろう？」という印象が残り、実際には何となく根っからは趣旨が分かりません。今回の稿でもこういった点を少し引き合いに出していますが、貴会員が Newsletter 用に拙稿からポイントを定めようとされるなかで徐々に本連載 No.1 から一貫して私が意図する内容を把握されるようになるはずと思っています。

それぞれの稿はバラバラではなく、すべて有機的につながるように考えている旨はすでに言いました。他会員に興味・関心を向けてもらう目的(purpose)で、事務局の貴会員自身による注目点の選択(selection)はすべて意義があると思っています。基本的に「切り貼り式」での入力・手作業(handwork)がやはり簡単で気楽でしょう〔もちろん独自に個人的なコメントを入れていただいてもよいですが、貴会員の書き物なら何でも他会員に注目されるでしょう〕。

So, it will be a very good thing that you, office manager, make a selection of it and get it cut out like you do it with scissors and put it in there (in the newsletter) with your hands, so that all the others in the society may take interest in it.

「切ること」は「決定すること」でもあり、手(hands)を用いる道具(instrument)としての scissors（ハサミ）と decision（決定）は同じ PIE（印欧祖語）の phoneme（音素）として復元された/SKER/ に由来する同系語だとはすでに確認しました〔本連載（59）の(2)、(66)の(1)参照〕。ラテン語での[cide], [cise]などを経由したことも英語史は教えますが、英語での語形 ci・音声[si]からこのあたりを直感したいわけです。語の cut（切る）自体に[k]音があります。ともかく英語入門期の早い段階で泥縄式の学習法にならないよ

う、膨大な数の英語語彙も一定の数の root sense（原義）から派生していることの認識は重要に違いありません。

この点はやはり英語の全体像を上から手早く眺めてしまうことになる Basic に接すると真に実感もできることになるはずでしょう。Ogden は最初は Basic を Panoptic English と命名しましたが、この panopticon（パノプティコン）で上から眺める英語体系そのものにあまり注目されません。Basic 理論が先にあり EP 本も生まれました。この根っからの認識なしには事は始まりません。

英語修得では遠回りをしないよう近道をしたいものです。幾何学的に２点間の最短距離は直線(straight line)であり＜From $\alpha$ Through $\beta$ To $\gamma$＞ということで、私は近道ばかりを何かと思索しています。突っ込みのための近道をしたいと思っています。いずれにせよ、やはり入門期の３年間は徹底的に文部科学省検定本３巻の音読に集中するのが要領がよいはずで、すべてを踏まえたいろいろな意味でそれが一番の近道に違いありません。何でもある種の「目的」のため「近道を選択すること」、このこと自体も 'take a shortcut' することで「切ること・切り取ること」となります。

That's it. The words "scissors" and "decision" came from the same root, the sense of which is 'cutting' [< /SKER/ in PIE (the Proto-Indo-European)]. The PIE root /SKER/ became [cide], [cise], etc. in Latin. And the word "cut" itself is said to have come from /SKER/ and it has the sound of [k] in it. The sound of "cut" is [kʌt]. It is important anyway for learners of English to keep it in mind that words in English are grouped into a limited number of those which have the same root.

In that sense not only EP but PE ('Panoptic' English) which is Ogden's first naming for BE ('Basic' English) is of great help to them. Is it possible to do EP rightly without PE ? In other words, without being conscious of the fact that EP came from Ogden's (and Richards') theory of language ? Naturally the answer is "no". PE (or BE) came first, not the other way round. So, to go into its details more

attention is to be given to their theory in our society, which has its right or regular name 'The Japan Basic English Society'.

At the same time it is to be specially noted that in the early stages of learning English in Japan, i.e., in the first three years of learning it, full attention has to be given to the three books being used at school under the guidelines of the government education office. 'Reading them out' over and over again — that is the most important thing for the learners to do, I'd say, specially in the first three years. Here it is to say that they take a 'shortcut' — a shortcut to the learning of English.

英語では上記、季節・天候などで expletive（虚辞）の It を振り出しに考えたり、さまざまな局面で it が文中に織り込まれる点にもっと注目したいです。私は独自にこれを英語言語における事の一種の 'ritualism'（儀式）としても考えています。指示的な存在文(existential sentence)での here, there もそう思えます。dummy 'it' を用いる it ... that, it ... to の英語構文など正に儀式っぽさを感じさせます。将棋なら駒の「歩」の布石と考えたいです〔こういう it は EP 本なら III での扱いとなりますが〕。今回、上での 5 段落に分けて書いてみた文では指示的(referential)と儀式的(ritual)な it を（its, itself を含めて）全部で 20 回使っていることになるでしょうか。最後にもう 1 つ it を用いて締めくくりとします。

That's about it this time.（今回はそんなところで）

ここでの it は強音となり語強勢(word stress) を受け実際には IT となるわけですが、音声上での語強勢に関しては執拗にこだわるとかえって混乱が起こり逆効果で要注意だと思っています〔目下の連載稿でたびたび触れています〕。今後のため何らかの参考にしていただけばと思い「資料」として少し書きました。

後藤

3/14/ 2025